



# 学 校 便 り 琢 磨

令和4年度 第22号 R5.2.16 三豊市立詫間小学校

## 児童会役員引継式

ホームページの学校便りには、写真を掲載していません。

今年度も、児童会役員引継式は、感染症拡大防止対策のため、オンラインで行いました。以下は、私が、この引継式で話した概要です。

6年生の皆さんは、卒業まで残すところ約1か月となりました。これからは、卒業に向かってまっしぐらといった感じですね。そして、詫間小学校の最上級生というバトンを受け取るのが、5年生の皆さんです。今日は、その一つである児童会役員の引継式（新児童会役員の任命式）です。

まずは、6年生の児童会役員の皆さん。本当にお疲れ様でした。皆さんの小学校生活の後半の3年間は、コロナ禍の中での学校生活となりました。全校児童が集まっての行事はほとんどできませんでした。そんな中でも、6年生の皆さんが企画・運営をしてくれた「日本一の七夕輪飾りを作ろう」では、6年生が、事前に準備して、下級生を手伝い、暑い中でその輪飾りをつなぐことができました。テレビのニュース、全国のニュースでも報じられました。輪飾りの長さはもちろんですが、全校生が一つになって輪飾りをつないだことは、1年生から6年生まで、全員の心をつなぐと思います。そのイベントがきっかけとなって、いろいろな委員会が様々な活動を工夫して行ってくれました。学校の目標どおり「日本一」の学校にしてくれたと思います。ありがとうございました。

そして、新児童会役員に選ばれた6名の皆さん。おめでとうございます。これからは、皆さんが詫間小学校をリードしていく新たなリーダーとなります。よろしくお祈りします。でも、実は、もう皆さんは、既にこの学校に素晴らしい風を流してくれています。児童会役員選挙演説があった日、休み時間に3年生のある子が校長室にやってきました。その子は「校長先生。今日の児童会役員さんのお話を聞いて感動しました。そして、ぼくもあんなお兄さんやお姉さんみたいになりたいなあと思いました。どうやったら、児童会役員になれるか。」と、聞いてきたのです。その子には、私からアドバイスしておきましたが、うれしかったです。何がうれしいのかというと、6年生が日本一と思える学校にしてくれた、それを引き継いで、もっともっと素晴らしい学校にしていきたいという思いを皆さんが一生懸命に演説した、そしてそれを聞いた下級生が、上級生に「あこがれ」の気持ちをもった、このつながりは、まるで、七夕の時の「輪飾りのつながり」のようだと思います。この時から、もう新役員の皆さんは、この学校に心地よい風を吹かせてくれていたのです。大いに期待しています。

令和5年度児童会会長 亀山 凜人  
 役員 百々 壯太郎 伊瀬 日南子 門田 陽登  
 山下 ひなた 西山 羽瑠 (敬称略)

## 今後のマスク着用について

ご承知の通り、政府は、今後、マスクを原則外すという方向で検討しており、それを受けて香川県知事もその方向で教委委員会に指示を出したという報道がありました。保護者の皆様におかれましては、3月からはマスクを外すようになるのだろうか、卒業式はどうするのだろうか、早く方針を周知してほしいといった思いがあると存じます。

このことにつきましては、三豊市の教育委員会からの指示があり次第、本校の実情に合わせて方針を決定し、学校便り等でお知らせいたします。しばらく、お待ちください。

## あこがれ

表の記事で、新児童会役員に立候補したお兄さんやお姉さんに「あこがれの気持ち」を抱いた3年生のことを紹介しました。ちょうどいい機会なので、私のあこがれについて今日はお話します。

まずは、お掃除です。私が通っていた勝間小学校では、縦割り清掃とあって、1年生から6年生までのいろいろな学年の子どもで班を編制して掃除をしていました。詫間小学校も、この前まで、同じような掃除の仕方をしていたので、知っている人も多いと思います。1年生の私は、ある特別教室の掃除当番になりました。音楽室だったか図工室だったか忘れてしまいましたが。6年生のお姉さん、5年生のお兄さんをはじめ、各学年から1人ずつで6人いたと思います。私が、机を持ち上げることができなくて、机を押して運んでいたら、6年生のお姉さんがすぐに来てくれて「よしき君。お姉さんがしてあげる。」とあって、重い机を軽々持ち上げて、さっと運んでいきました。「よしき君は、いすを運んでね。」と言われたので、お姉さんがしているように、いすを持ち上げて運びました。お姉さんのすぐ後ろをずっと追いかけて運びました。そうすると「そうよ。持ち上げて運ぶと、ごみをいっしょに運ばないですむでしょ。」と言ってきて、もう、うれしくて、掃除の時間が待ち遠しくて、このお姉さんの言うことは何でも聞こうと思ってしまいました。これは、まちがいなくあこがれの気持ちでした。そして、その時、ぼくも大きくなったら、あんなお姉さんみたいになりたいと思ったのでした。

次は、登校班のお兄さんにあこがれた話ですが、これについては、絵本にしています。以前に学校便りの裏面に連載しました。(ホームページの「学校便り」→「2020年No.21号」～)ホームページでもご覧いただけますし、本校の玄関の掲示板(事務室に向かって右側)にも掲示していますので、興味がある方はご覧ください。

そして、3年生の時です。6年生のお兄さんたちが休み時間にドッチボールをしていました。3年生から見ると、見上げる程背の高いお兄さんたちが、ビューンと見えないくらいの速いボールを投げていました。すごい!とっていたら、そのボールをお腹の所でバシッとキャッチするではありませんか。すごい!かっこいい!と見ていました。そうすると、その中の一人(同級生の友達のお兄さん)が、「3年生も一緒にやるか?」とさそってくれました。私たちは、迷わず「うん。」と返事をしました。そのお兄さんは、「でも、手加減はせんよ。当たって泣くなら、はじめからやめとけよ。」と言いました。私を含め、そこには6人くらいの3年生がいましたが、みんな「分かった。入れて!」ということで、その日から毎日、休み時間に、6年生と3年生が混じったドッチボールをすることになりました。もちろん、6年生に狙われると、逃げることは難しいのです。ものすごく強いボールが当たり、とても痛いのですが、泣く子なんて一人もいません。あこがれのお兄さんたちと一緒にドッチボールができることがうれしくてうれしくてたまらなかったのです。ある時、私は、6年生に狙われてしまいました。もう当てられるのは間違いありません。と思った瞬間、黒い大きな影が私の前に現れ、バシッという音がしました。6年生のお兄さんの一人が、私の前に立って守ってくれたのです。そのお兄さんが、私を狙ったボールを、私の前に立ってキャッチしてくれたのです。「かっこいいなあ、ぼくも、あんな6年生のお兄さんみたいになりたいなあ。」と心から思いました。

あこがれは、小学生の時だけではありません。中学でも、高校でも、そして大人になってからもその気持ちはずっともっています。還暦を迎える今でも、その気持ちは少し残っています。教員になって、先輩の授業を見せていただいた時に、あんな風に、子どもの目がキラキラする授業ができる先生になりたいなあ、と先輩教員にあこがれたものです。

私は、子どもたちに、「人は目を向けた方に必ず進んでいくものだ。」と話しています。「あこがれ」や「あんな風になりたい」という思いは、向いた方向＝目標なのだと思います。夢がない、具体的な希望をもっていないという人も、あこがれの人、あんな風になりたいの「あんな」人はいるのではないのでしょうか。私は、それが目標であり夢や希望なのだと思うのです。それが途中で変わってしまっても、目標に向いて進んでいこうとする態度や気持ちは残るはずで。そうすると、次の「あこがれ」に向かって人は進んでいくことができるのではないかと思うのです。